

妹と背の山

万葉歌十五首

(一) これやこの 大和にしては 我が恋ふる

紀伊路にありといふ 名に負つ背の山

阿閉皇女(巻一の三五)

訳)これこそまさしく 大和において わたしが見たがっていた 紀伊路にあるという 名高い勢能山なのか

(二) たくひれの かけまく欲しき 妹の名を

「この背の山に かけばいかにあらむ

丹比真人笠麻呂(巻三の二八五)

訳)たくひれの「口に出して呼びたい」妹「という言葉」この勢能山についたらどうでござんす

(三) よろしなへ 我が背の君が 負ひ来にし

「この背の山を 妹とは呼ばじ

春日蔵首老(巻三の二八六)

訳)具合よく わが背の君が 名のってきた「背」という名を持つこの山を いまさら「妹」とは呼ぶまじ

(四) 真木まぎの葉はの しなせふ背せの山やま しのはずて

わこゆこは
我が超え行けば 木の葉知りけむ

をだの つかふ

小田 事(巻三の二九一)

訳(真木の枝葉が たわむばかりに茂っている勢能山を賞美するゆとりもなく 越えて行くが木の葉もわたしの気持をわかってくれたろう)

(五) 後おくれ居ゐて 恋こひひつつあらずは 紀伊きいの国くにの

いもせ
妹背いもせの山やまに あらましものを

かさのおそみかなむら

笠朝臣金村(巻四の五四四)

訳(残されて 恋しがっているくらいなら 紀伊の国の 妹背の山で あるほうがまだ)

(六) 紀伊路きいにこそ 妹山いもやまありといへ 玉たまくしげ

ふたかみやま いも
一上山いもも 妹いもこそありけれ

作者不詳(巻七の二〇九八)

訳(紀州路に 妹山はあるというが 「玉くしげ」「一上山」にも 妹山があったことだ)

(七) 背せの山やまに 直ただに向むかへる 妹いもの山やま

いこゆゑ
事許いこゆゑせやも 打橋うちはし渡わたす

作者不詳（巻七の二一九三）

訳（背の山に まっすぐに向いている 妹の山は 承諾したのか 打橋を渡してある）

あぢらるま き き くに

（八） 麻衣 着ればなつかし 紀伊の国の

いもせ やま あさま わぎも

妹背の山に 麻時く我妹

ふじわらの まへつきみ

藤原 卿（巻七の二一九五）

訳（麻衣を 着ると懐かしく思い出される 紀伊の国の 妹背の山で 麻種を蒔いていたあの娘が）

いもこ あ こ せ やま

（九） 妹に恋ひ 我が超え行けば 背の山の

妹に恋ひずて あるがともしそ

作者不詳（巻七の二二〇八）

訳（妻を恋しく思いながら わたしが越えて行くと 背の山が 妹山を恋しがらずに いるのが羨ま
しい）

（十） 人ならば 母が最愛子そ あさもよし

き かは へ

紀の川の辺の 妹と背の山

作者不詳（巻七の二二〇九）

訳（人だったら 母の愛児だ 「あさもよし」 紀の川のそばの 妹と背の山は）

わが妹に あこ

(十一) 吾妹子に 我が恋ひ行けば ともしくも

なら を

並び居るかも 妹と背の山

作者不詳(巻七の二二二〇)

訳(わが妻を 恋しく思いながら行くと 羨ましくも 並んでいることだ 妹と背の山は)

いも

いまわ

(十二) 妹があたり 今そ我が行く 目のみだに

われ

いごと

我に見えこそ 言問はずとも

作者不詳(巻七の二二二一)

訳「妹」のあたりを 今こそ行くのだ 目にだけでも わたしにみえてくれ もの言わなくても

おほなむら

すくなみかみ

(十三) 大汝 少御神の 作らしし

いもせ

妹背の山を 見らくしよしも

かきのもののおそみひとまろ

柿本朝臣人麻呂歌集(巻七の二二四七)

訳(大汝 少名彦名の神々が 作られた 妹背の山を 見るのはいいものだ)

せ

もみぢつねし

かみをか

(十四) 背の山に黄葉常敷く 神岡の

けふ ち

山の黄葉は 今日か散るらむ

作者不詳(巻九の一六七六)

訳)紀伊の背の山に 紅葉がずっと散り敷いている 大和の神岡の 山の紅葉は 今日散っているこ
とだろつか)

(十五) 紀伊の国の 浜に寄るといふ 鮑玉 拾はむと言ひて 妹の山 背の山越えて

ゆ きみ き き たまほこ みち いた ゆふうら
行きし君 いつ来まさむと 玉梓の 道に出で立ち 夕占を

わ と ゆふうら われ っ わきせこ な ま きみ
我が問ひしかば 夕占の 我に告ぐらく 吾妹子や 汝が待つ君は

おき なみ き よ しらたま へ なみ よ もと
沖つ波 来寄る白玉 辺つ波の 寄する白玉 求むとそ 君が来まさぬ

ひり ひせ なぬか ふつか
拾ふとそ 君は来まさぬ 久にあらば いま七日だみ 早くあらば いま二日だみ

あらむとそ 君は聞こしし な恋ひそ吾妹

作者不詳(卷十三の三三一八)

訳)紀伊の国の 浜に寄るといふ あわび玉を拾って来ようと言って 妹の山 背の山を越えて行っ
た君は、いつ帰って来られるかと 「玉梓の」 道に出かけて 夕占をして わたしが聞いたとこ
ろ 夕占が 告げていうには これ女よ おまえの待つ夫は 沖の波に 寄り来る白玉 岸の波
の 寄せる白玉を 取るうとして 帰って来ないのだ 拾おうとして 帰って来ないのだ 遅く
ても もう七日ほど 早ければ もう二日ほど いる気だと 夫は言われたぞ そう恋しがるな
女よということだった)